様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６４９４

研究課題名（和文）教員養成段階における子どものつまずきに対する省察能力の変容

研究課題名（英文）Change in the reflection ability to the student's failure in the teacher education curriculum

研究代表者
糸岡　夕里（ITOOKA, Yuri）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３８７９６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，実践的指導力のアセスメントツールを開発することを目的とし，以下3点の研究を行った．①教育実習指導教員が重視する実習生に身に付けて欲しい内容についての調査，②実習生が実施した授業に対する教育実習指導教員の指導内容とその後の実習生の授業の変容についての調査，③実習生が授業を実施する際に意識したこと，その理由とできばえについての調査．
　その結果，教育実習指導教員は，指導のポイントを絞ることや，子どもにとってわかりやすい指導言葉についての指導を行っていたこと，実習生の省察水準（秋田喜代美，1997）については，多くが「技術的省察」にとどまっていたことが明らかとなった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本では，教師の実践的指導力を保障するため毎年さまざまな改革案が出される一方で，その評価基準の作成については，何ら方策が出されていない．諸外国では，アセスメントに基づき成果を検証し，改善し続けるサイクルが構築されつつある．
　そこで本研究では，教員養成段階における実践的指導力を育むための重要な位置づけである教育実習を対象として，教育実習指導教員がどのようなことを重視し実習生に対する指導を行っているのか，その結果，実習生にどのような実践的指導力が身に付いたのかを明らかにすることは，よりよい教師教育へ向けた有益な知見となると考えた．

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to develop an assessment tool of the practical teaching skill and 3 points of below was studied. 1) Analysis about the contents a student teaching guidance teacher wants the student apprentice who emphasizes it to acquire, 2) Analysis about change in the class of the student teacher who is after that with the guidance contents of a student teaching guidance teacher to the class a student apprentice put into effect, 3) analysis about thing of a student teacher is conscious, and the reason and workmanship when a student teacher practices the class.
　As a result, the following 2 things became clear. 1) A student teaching guidance teacher was being guided in a teacher narrows a point of guidance down, and a teacher uses a plain guidance word for a child, 2) There was "technical reflection" about the reflection standard of the student teacher.

研究分野：体育科教育

キーワード：教師教育　教員養成段階　省察　教育実習　教育実習指導教員　実習生

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本では、教師の実践的指導力を保障するため毎年さまざまな改革案が出される一方で、その評価基準（Professional Standard）の作成については、何ら方策が出されていない。諸外国では、1980 年代からの教師教育改革のなかで評価基準を作成し、教員養成カリキュラムの質を保障するためアセスメントに基づいて、その成果を検証・改善し続けるサイクルが構築されつつある（全米教職専門基準委員会(NBPTS),2001；英国学校教職員職能成長担当機関(TDA),2002；独国常設文部大臣決議(KMK),2004)。

このような世界の動向を背景に筆者は、実践的指導力の１つである省察能力に着目し、省察能力について簡便なアセスメントツールを作成した（研究代表者:糸岡夕里, 平成 23・24 年度科学研究費助成事業)。その結果、授業実践に対する省察能力についてのアセスメントは可能となったが、授業において発揮された実践的指導力のアセスメントにまでは至っていない。

教員養成系の大学においては模擬授業を取り入れた授業が様々に展開されており、実践的指導力の育成を重視した教員養成カリキュラムが充実してきている。しかしながら、実践的指導力についてのアセスメントが充分であるとはいい難く、教師の実践的指導力を保証するためにはアセスメントに基づいて、その成果を検証・改善していくことが求められている。

そこで本研究では教員養成段階における子どものつまずきを把握する力に着目し、子どものつまずきをどの程度把握し、どのような指導を行ったのか、実際の指導場面と省察内容の変容を検討することにより、教員養成段階における実践的指導力のアセスメントツールを作成することによって、よりよい教師教育へ向けた有益な知見となると考えた。

２．研究の目的

本研究では、教員養成段階における子どものつまずきを把握する力に着目し、子どものつまずきをどの程度把握し、どのような指導を行ったのか、実際の指導場面と省察内容の変容を検討することにより、実践的指導力のアセスメントツールを開発することを目的とした。 そこで次の 3 点を目的として研究を行った。

(1) 教育実習期間中、教育実習指導教員がどのようなことを意識して指導しているのかを明らかにすることを目的とした.

(2) 目的（1）の結果より、本研究で焦点化する予定であった子どものつまずきを把握する力といった教材解釈力や生徒理解力という内容に限定せず、教育実習生の授業に対する省察場面において、教育実習指導教員がどのような指導を実践していたのか、またその結果、教育実習生の授業がどのように変容したのかを明らかにすることを目的とした。

(3)　教育実習生が授業を実践する際に意識したこと、その理由とそのできばえを明らかにすることによって、省察の変容を明らかにすることとした。

３．研究の方法

(1)教育実習が始まる前に、教育実習指導教員(A 大学教育学部附属中学校教諭 2 名)を対象に、次の 3 点についてインタビュー調査を実施した。なお、対象とした教育実習指導教員の属性について表１に示した。

①実習中に身に付けて欲しいと内容
②実習で最初に指導する内容
③実習までに身に付けて欲しい内容

表１　A 大学教育学部附属中学校教諭 2 名の属性

	年代	附属での勤務年数	教員歴
X 教諭	40 代	6 年	21 年
Y 教諭	20 代	1 年	5 年

(2) 平成 28 年 9 月より 5 週間の教育実習期間中、3 名の教育実習生の各授業、その後の省察場面において教育実習指導教員がどのような指導を行ったのか、指導後の教育実習生の授業、それらの実際を映像に記録し、教育実習指導教員の指導内容を視点として、授業がどのように改善したのか分析を行った。また、授業の改善の有無について分析するにあたり、教育実習指導教員の指導をふまえ、授業が改善されていないと判断した場合、「なぜそのような授業を実践したのか」について実習生へインタビュー調査を実施した。なお、教育実習生の属性については、表 2 に示した。

さらに、本研究において対象とした教育実習の特徴として、実習が始まる前に単元構造図（単元と見通した指導と評価の計画図）を作成し、実習が始まり 2 週間程度経過した頃、対象とす

る生徒の様子がおおよそ理解できた頃に、教育実習指導教員、実習生、および大学教員とともに単元構造図を再考することが挙げられる。実習生の計画した単元構造図を通して、教育実習指導教員と大学教員との連携が図られ、実習生に身に付けて欲しい内容について、教育実習指導教員に一任することなく、互いに共有できる機会が確保されている。表 3 は実習生 2 が作成した単元構造図について示した。

表 2　教育実習生（A 大学教育学部 3 回生）の属性（平成 28 年度）

	授業対象学年	授業対象領域	体育授業および大学での学習経験	所属している部活
実習生 1（男性）	1 年，男子	陸上（ハードル）	有	バスケ
実習生 2（男性）	2 年，男子	器械（鉄棒）	有	サッカー
実習生 3（女性）	3 年，男子	武道（剣道）	無	サッカー

表 3　実習生 2 が作成した単元構造図（器械運動：鉄棒運動）

単元目標		
		（技能）上り技、回転技、下り技の基本的な技を滑らかに行い、条件を変えた技・発展技を行い、それらを組み合わせる
		（態度）積極的に取り組み、良い演技を認めようとし、健康・安全に気を配ることができる
		（知・思）技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し,課題に応じた運動の取り組み方を工夫できる

		1	2	3	4	5	6	7	8
学習の流れ		●集合・整列・準備運動・めあての確認							
	10	●オリエンテーション・学習の	●回転技・下り	●回転技・上り	●回転技	●振り返り練習	●グループ練習	●発表会練習	●発表会
			①基本的な技を滑らかにできる						
						●中間確認		③学習した技から組み合わせる	
	20	●実力確認	○基本的な技	○基本的な技	○基本的な技	②条件を変えた技・発展技ができる			
			○発展技	○発展技	○発展技			①課題に応じて適した練習方法	
		①技の名称や行い方					②良い演技を認めようとする		
	30	①健康・安全に気を配る							
		●整理運動・学習のまとめ							
評価時期	技能					①【観察】		②【観察】	③【観察】
	態度				①【観察】			②【観察】	
	知識	【プリント】	①【プリント】	①【プリント】					
	思考判断						①【観察】		

（3）平成 29 年 9 月より 5 週間の教育実習期間中、3 名の教育実習生が実施した 6 時間単元の各授業後、次の 3 点についてインタビュー調査を実施し、得られた回答を対象として、「省察の水準（秋田喜代美、1997）」について分析を行った。なお、教育実習生の属性については、表 4 に示した。

①今日の授業で意識したことは何ですか
②それはなぜですか
③そのできばえはどの程度でしたか

表 4　教育実習生（A 大学教育学部 3 回生）の属性（平成 29 年度）

	授業対象学年	授業対象領域	体育授業および大学での学習経験	所属している部活
実習生 4（男性）	1 年，男子	器械（マット）	有	サッカー
実習生 5（男性）	2 年，女子	武道（剣道）	無	テニス
実習生 6（女性）	3 年，女子	ダンス	有	陸上

4．研究成果

（1）教育実習指導教員に対する 3 点のインタビュー調査により得られた回答を端的にまとめ、表 5 に示した。これより、教育実習期間中、教育実習生に身につけて欲しい内容として、教材解釈力や生徒理解力というより、生徒とかかわる愛情や自信をもって生徒とかかわる態度を重視していることが明らかとなった。

この結果を受け、研究当初は子どものつまずきを把握する力といった教材解釈力や生徒理解

力という内容に焦点化する予定であったが、予定を変更し教育実習期間中に身に付けて欲しい内容について限定することなく、教育実習生の授業に対する省察場面において、教育実習指導教員がどのような指導を実践していたのか、またその結果、教育実習生の授業がどのように変容したのかを明らかにすることとした。

表5　インタビュー調査に対して得られた回答

	①実習中に身に付けて欲しい内容
X教諭	回りをしっかり観る力，臨機応変な対応力
Y教諭	生徒の反応への対応力
	②実習で最初に指導する内容
X教諭	教員の姿を観ること
Y教諭	安全面
	③実習までに身に付けて欲しい内容
X教諭	特になし
Y教諭	・・・(回答に困惑)

(2)教育実習指導教員が実習生の授業に対して指導した内容とその後の実習生の授業改善の有無について分析した内容の一例として、実習生2の授業に対する教諭Yの指導内容と、その後の授業の改善の有無について表6に示した。

これらの分析の結果、実習生の実際の授業に対し、一授業を余裕をもって指導できるような効果的・効率的な指導や，子どもにとってわかりやすい指導言葉いついての指導があり，その後の教育実習生の授業において改善がみられたことが明らかとなった。

表6　実習生2の授業に対する教諭Yの指導内容とその後の授業の改善の有無およびインタビュー結果

教諭Yの指導内容	授業改善の有無	教諭Yの指導後の授業に対するインタビュー
生徒がまぶしくないように集合位置を工夫する	無	授業を実施する時間帯により太陽の位置が変割ってしまい、鉄棒の位置と生徒の集合位置との関係について、想定することが難しかった。
ワークシートで本日のねらいを生徒が記入するようにしている点はいいが，ねらいを口頭で伝えるだけでは充分に伝わらないので，ホワイトボード等を使用する等工夫する	無	ホワイトボードが見える位置への移動時間を考えて使用しなかった．残りの授業も少なかったので．もし，授業がもっと続く場合には使用したかもしれない．
逆上がりの指導の際，指導内容は間違っていないが，生徒がイメージしやすいようなわかりやすいような言葉遣いを工夫する	有	―
膝掛け振り上がりの指導の際，「脚を上げて」という言葉が多かったが，もっと違うポイントもあるので，生徒同士が観る視点を限定しすぎないことも大切にする	有	―

(3) 実習生が各授業を実践した後に実施したインタビュー調査を分析した内容の一例として、実習生4に対するインタビュー調査の回答と授業のできばえについて表7に示した。

実習生の省察の多くが「技術的省察」の水準であったが、実習生4の5時間目には、「実践的省察」の水準にあたる省察があったことが明らかとなった。

表７　実習生４の各授業後のインタビュー調査の回答（器械運動：マット運動）

時間数	①意識	②理由	③評価
1	授業の先生としての第一印象の作り方	前日に他の実習生の授業を見た時に進行の妨げになるような雰囲気があったので授業のルールをしっかりと教えた	○
2	ルーブリックに適した正しい評価ができるようになる	前回の授業で自己評価をビデオを見ながらしたが評価がルーブリックに適していなかった生徒がいたので，その部分をもうちょっと厳密に自分の演技を評価してもらうためにした	○
3	技のポイントの理解	指導教員に言われて早めに直さないといけないと思ったから	○
4	正しい後転を知識的に理解すること	1回目に見せた後転が演技として良くなかったのでそこを改善するために	○
5	生徒たちにこれまでの授業で自分が何をしてきたのかを生徒自身が感じとれるようにした	自分が体育をしていた時に単元が終わった時にこれで自分が何がよくなったんだろうなと疑問に思うことがあったので，そういうところに着目すればやった意味があったなと生徒が思うようになるのではないかと思ったので	○
6	構成が途中のまま，テストを撮ることがないように頻繁に残り時間の確認，呼びかけなど	集団演技の構成をさせる活動がメインだったが，前回松浦先生の授業の協議会を行ったときに，授業中の狙いであったり目標を達成するところまでは，最低でも行った方がいいということを協議会で話したので	○
7	演技の構成	隠していた評価という部分について生徒たちが考えずに演技構成してしまうことが考えられたので，その部分が一番点数を取るためには大事だということを言って意識させる	○
8	演技の答えを与えるときに，それが何故大事なのかということを知ってもらう	生徒自身が隠された項目について考えて見付けられるように，１番できていた演技の動画であるとか，自分たちの動画をみさせて最終的にもう1つ踏み込んだフィードバックを与えられたらなと思って授業を考えました	△

（4）本研究の当初の目的は、教員養成段階における実践的指導力のアセスメントツールを作成することであったが、研究を進めるにあたり、得られた研究結果をふまえ、より発展的な研究とするために研究目的を修正することとした。その結果，アセスメントツールの作成までには至らなかった。本研究の一連の結果をふまえ、よりよい教師教育へ向け教員養成段階における実践的指導力のアセスメントツールを作成することが今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①　糸岡　夕里、教育実習生が実践した授業の領域の違いによる省察の差異：器械運動とダンスとの比較、愛媛大学教育学部保健体育紀要、査読無、第 10 号、15-20

〔学会発表〕（計　2　件）

①　糸岡　夕里、日野　克博、教育実習生の授業に対する省察能力の変容、日本体育学会、2018

②　糸岡　夕里、日野　克博、教育実習指導教員の指導と教育実習生の授業との関係、日本スポーツ教育学会、2016

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

ホームページ等：なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。